

7. 神奈川県リハビリテーションセンターにおける 低出生体重の既往のある心身障害児に関する 久留米方式による後方視的研究

熊谷 公明* 栗原 まな* 今井 祐之*

はじめに

本研究班の松石、栗谷らが、乳幼児の発達障害を効率よく、早期発見するために、出生時体重、在胎週数、在院日数、性別をもとにした、ハイリスク児の検討による、各危険因子のカテゴリーの偏相関係数及び「重み」にもとずいた、標準化スコアが神経学的予後推定に正答率65%であるとの報告から¹⁾、本法を用いて、神奈川県総合リハビリテーションセンターに入院あるいは通院している低出生体重児について検討を試みてみた。

対象並びに方法

対象：神奈川県リハビリテーションセンターの神奈川県リハ病院に現在入院または通院中、また福祉施設に在園中の児者を対象とした(表1)。

年齢幅	男	女	計
① ー 5	7	9	16
② 6-10	11	4	15
③ 11-15	8	12	20
④ 16-20	8	4	12
⑤ 21-25	6	4	10
⑥ 26-	5		5
	45	33	78

方法：松石・栗谷らの出生時体重、在胎週数、在院日数、性別をもとにした、ハイリスク児の検討による、各危険因子のカテゴリーの偏相関係数及び「重み」にもとずいた、標準化スコアを用いて、対象に特定の調査用紙を用いて記入し、予後の正常異常を判定し、その結果と現在の状況との相関を検討してみた。

結 果

[対 象]

総数：78例、性別 男45例、女33例(図1)

年齢：5ヶ月から45歳(平均13.4歳)(図2)

[疾 患]

脳性麻痺：21例

単独7例、精神遅滞を伴うもの8例、てんかんを伴うもの1例、精神遅滞とてんかんを伴うもの12例

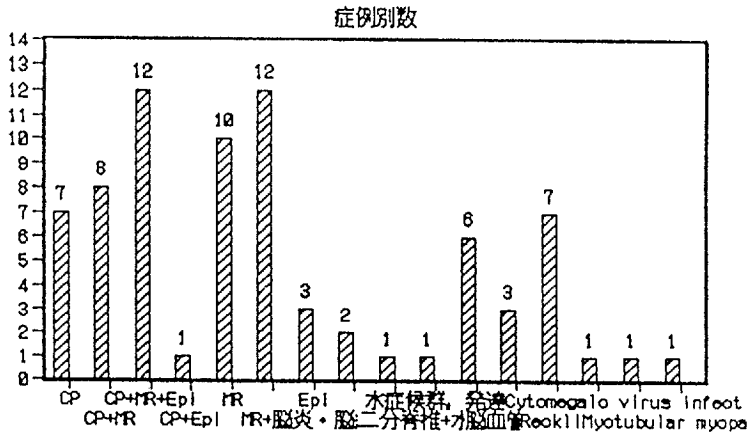
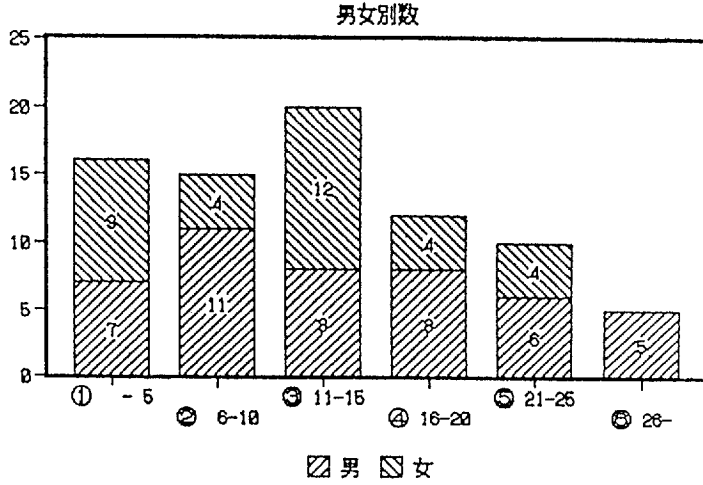
精神遅滞：22例

単独10例、てんかんを伴うもの12例、てんかん：3例

脳炎・脳症後遺症：2例

水頭症：2例 単独1例、二分脊椎を伴う1例
奇形症候群・染色体異常：6例

*神奈川県総合リハビリテーションセンター小児科



脳血管障害：3例

発達の遅れ，言語発達の遅れ：7例

神経皮膚症候群：1例

(Reckling-hausen 症候群)

胎内感染症：1例

(サイトメガロウイルス感染症)

先天性ミオパチー：1例

(Myotubular myopathy)

[神経予後]

異常 28例

-10以下 異常 1例

-10~-5 異常 3例(重症心身障害児者 2例)

-1.3401~-5 異常22例(重症心身障害児者 4例) 境界 2例

正常 50例

-1.3401~+5 境界 5例 異常28例(重心 4例)

+5~+10 境界 4例 異常 9例(重心 4例)

+10以上 異常 4例

正答率 $28/78 \times 100 = 35.9\%$

考 察

松石・粟谷の結論では正答率は65%であったが，当センターの低出生児を用いた検討では，

正答率は35.9%であった。そこで、年齢階層別に検討してみた。スコア正常で、現在神経学的異常を示している症例について検討してみた。10歳未満は25例、異常は5例。正答率20%。10歳～20歳未満は37例、異常15例。正答率40.5%。20歳から30歳未満11例、異常4例。正答率36.4%。30歳以上5例、異常3例。正答率60%。従って年齢階層の増えるにつれて、正答率は上昇している。

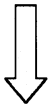
また得点が5以下に臨床的に異常な症例が33例含まれており、正常異常の判定基準をあげれば正答率はより高くなる。

結 論

年齢が高くなると、正答率は高いことが分かったが、どの年齢階層をとっても、正答率は松石の方法には及ばなかった。

文 献

- 1) 前川喜平, 松石豊次郎, 大谷靖世, 栗谷典量: 出生体重, 在胎週数, 在院日数, 性別をもとにしたハイリスク児の検討, 鴨下重彦編 平成2年度厚生省心身生涯研究, 小児の神経・感覚器等の発達における諸問題に関する研究報告書, 1991, 3, p50-53.



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



はじめに

本研究班の松石, 粟谷らが, 乳幼児の発達障害を効率よく, 早期発見するために, 出生時体重, 在胎週数, 在院日数, 性別をもとにした, ハイリスク児の検討による, 各危険因子のカテゴリーの偏相関係数及び「重み」にもとずいた, 標準化スコアが神経学的予後推定に正答率 65% であるとの報告から 1), 本法を用いて, 神奈川県総合リハビリテーションセンターに入院あるいは通院している低出生体重児について検討を試みてみた。